



み母はマリア み子はイエスキリスト

クリスマスメッセージ

クリスマスは「今でしょ!」



チャブレン 市原 信太郎



クリスマスというのは毎年必ずやってくるわけで、毎年同じ聖書箇所を読むわけですが、不思議なほど年ごとに異なるクリスマスのテーマに気づかれます。今年「時」というテーマがなぜか頭にあり、降臨節に入ってからずっとこのことを黙想しています。

クリスマスという物語は単なるイエスの誕生物語ではなく、この世界への神の予告なき介入からそれが始まることに大きな特徴があると思います。天使ガブリエルはおとめマリアに何の前触れもなくいきなり現れ、理由も説明もなしに「あなたは身ごもって男の子を産む」と告げます。

当時の常識から言えば、婚約中の女性が同居前に妊娠することなど言語道断で、命にも関わるような状況に陥ることになるこの宣言は、マリアには迷惑さわまりないものだったでしょう。しかし、その理不尽な天使の宣言に対し、マリアは「お言葉どおり、この身に成りますように」と答え、クリスマスの物語が始まるのです。ヨセフにしても然り。婚約者の予期せぬ妊娠という出来事に動揺する彼を迎え入れなさい」と一方的に告げます。彼がそれを受け入れるところから、クリスマスの物語が始まったのです。

新約聖書で「時」を表す単語はギリシャ語で「クロノス」と「カイロス」の二種類があり、それぞれに意味が異なります。前者のクロノスは、文字通りの時間を表す言葉で、流れていく時を意味して

います。一方、後者のカイロスはかなりニュアンスが異なり、わたしなりに要約すると「意味を持った特定の時間」を示します。決定的な時、と言ってもいいかも知れません。まさに、ヨセフとマリアへの天使のみ告げは、二人にとって、そして全人類にとって決定的な意味を持ち、これを境に神の意志に基づく新しい時、カイロスが始まって、世界に新しい意味が与えられるというのが、クリスマスの大きな意味です。

クリスマスの物語は、あなたの人生に神は予告なく一方的に介入してくるという事実を、わたしたちに突きつけてます。ただし、そこに神の意志を読みとるかどうかは一人ひとりにゆだねられています。ほとんどの場合、わたしたちに天使が直接姿を見せたり、言葉をかけたりすることはないので、それは単なる出来事としてそこに出現します。それをただの偶然と片づける自由も与えられています。しかし、わたしたちがそこに何らかの意味を見いだすとき、それはカイロスとしての時の始まりとなり、新たな意味を持った人生の始まりとなるのです。

ある生物学者はこう言います。「いつか、生命もすべて科学で説明がつくと私は思っています。」そうかも知れませんが、生命という活動が「説明」されたところで、それが意味を持った時間、カイロスの始まりになりうると思えないのです。なぜ空は青いのか、なぜ木の葉

は緑なのか。そこに科学的な説明はつけられないでしょう。しかし、それを見て美しいと思う人がいない限り、それは単なる現象でしかなく、そこに意味が生まれることはありません。

宇宙の歴史は百三十五億年ほどであると言われます。しかし、その想像を絶する長い時間、それ自体には何の意味もありません。その長い時間の中で太陽が生まれ、やがて地球が生まれ、という出来事も、ある意味偶然の事故の結果のようなものです。しかし、そこに神の介入という意味を認める人たちによって、聖書は書かれました。詩編第八編の作者はこう歌います。「あなたの天を、あなたの指の業を、わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださったとは、人間は何ものなのでしょう。あなたが顧みてくださるとは、全宇宙の中では取るに足りない存在でしかない自分というものに、神が意味を与えてくださったという、ことへのまなざしがここにはあります。

百三十五億年という悠久の時間が流れ去っている中にあって、わたしたちの寿命などゼロに等しい。計算してみると、たとえわたしたちが百年生きたとしても、わたしたちの寿命を一ミリの長さで置いたならば、宇宙の歴史の長さは百三十五キロメートルにも達します。しかしそれでもなお、意味のない宇宙に意味を作り出す存在として、わた

したちはここに生きているのです。わたしたちが宇宙の一部であるということによってのみ、宇宙は意味を持ち、宇宙は空しい存在でなくなるのです。百三十五キロメートルのクロノスではなく、たった一ミリのわたしたちの時間こそがカイロスであり、意味を持った時間なのです。

今年の流行語大賞には、「今でしょ!」という言葉が選ばれました。これはまさしく、クロノスとしての漠然と過ぎゆく時間の中に、カイロスとしての時間を立ち上げさせる、魔法の言葉だと思えます。聖書のクリスマス物語に登場する人々は、社会的権力者でもなければ宗教的指導者でもありません。むしろ、ヘロデ王などは「ユダヤ人の王が生まれた」という知らせを聞いて不安を覚え、この不安はエルサレムの人々も皆同様だったと記されています。

彼らは、神の「今でしょ!」という呼びかけに耳を傾けることができませんでした。それができたのは、野原で夜通し働く、世間からはさげすみの目で見られていたであろう羊飼いたちです。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった」という天使の呼びかけは、空しく思われたかも知れない彼らの毎日の中に意味のある時間、カイロスを立ち上げさせ、彼らに神をあがめる心、神を賛美する心を起こすことになりました。

このクリスマスの物語を、毎年聞いているお話としてただ聞き流すか、あるいは羊飼いたちの話聞いたマリアのように心に留め思い巡らすか。それはわたしたちの側の決断にかかっています。神の「今でしょ!」という呼びかけを捕まえることができるか。そこに、私達の人生に決定的な意味を与える、カイロスとしての時の始まりがあり、神の呼びかけの声の響きがあるのです。

「今でしょ!」という言葉が選ばれました。これはまさしく、クロノスとしての漠然と過ぎゆく時間の中に、カイロスとしての時間を立ち上げさせる、魔法の言葉だと思えます。聖書のクリスマス物語に登場する人々は、社会的権力者でもなければ宗教的指導者でもありません。むしろ、ヘロデ王などは「ユダヤ人の王が生まれた」という知らせを聞いて不安を覚え、この不安はエルサレムの人々も皆同様だったと記されています。

「一つ上の段階へ」
—高二府中多摩川マラソン—
高一 尾谷 昂大

高二の学年行事「マラソン大会」5km・10km・ハーフマラソンの3種類のどれかに参加することになった。のだが、僕はハーフマラソンに参加した。「マラソンは人生のようだ」とよく聞くが、僕は人生にはこんなにも多くの試練があるのかと思いがちだった。スタートからゴールまでの走っている間、足の痛みが襲って来たり精神的にもきつかったりした。また腹痛などという体調面でも問題は起こった。しかしその一方、いつも一緒に学校生活を送っている友人らが今まで見せたことのないような苦しそうな表情をしながら懸命に頑張る姿を見ることが出来た。先生や友人、通りすがりの人々にたくさん声援を受けたが、ゴールにたどり着いた



尾谷 昂大 (Nomura Ryoma)

中学一年便り

アドベンチャー

「冒険ってどういう意味だと思っ？」
 これは、今年の春休みに参加したあるプログラムで最初の間われた質問である。考えたこともない問いに対して、生徒は困惑している様子であった。
 冒険と言われてみんなはどんなことを考えただろうか。中学に入学してからあつという間に時間が過ぎ、もう残すは後期の三か月とあつた。経験ばかりの前期とは違い、次第に中学の生活に慣れてきた中期はどんな時間であつたのかを振り返つてもらいたい。
 毎日、同じ時間に起きて学校に行き、決められたサイクルを繰り返して、なんとなく流れに身を任せて過ごしているだけで終わってはいないだろうか。
 身に覚えのある人は、この冬休みを良い機会にここで少し考え方を改めてみてほしい。
 冒険とは今までに踏み込まなかつた世界に一步足を踏み込むことである。
 そのようにプログラムでは説明された。どんなに難しい、ハイレベルなことでも、今できることであればその取り組みは冒険とは言われない。これまではやらずに避けてきたことに取り組んでみる。一步しか足を踏み出さなかつたことに二歩踏み出してみるのが大切なのである。
 私もプログラムに参加して意識を変える必要があると感じた一人である。少しでも共感してもらえたら、自分自身に期待しながら共に頑張っていこう。「アドベンチャー」精神に溢れたみんなの姿が見られることを楽しみにしている。
 (齋藤壽春)

中学二年便り

「とにかくやってみよう」

大学を卒業して教員生活を始めた年に、私は初めて馬に乗りました。生徒の引率で一緒に乗りなさいと言われたのですが、内心嫌でした。馬は泥沼だし、馬は臭いしヨダレは汚い、蹴られたら痛そうだし。とにかく馬は遠くで見る物と思つていたので、嫌々乗つてみると、景色はよく見えるし、走る時の風を切る感覚は爽快でした。馬の動きに自分の身体を合わせる一体感、ジャンプしてバーを超える時の充実感はずいぶんいい。いっぺんで虜になり、それから乗馬の時間が待ち遠しくなりました。最近では乗らなくなりましたが、初めに行かせてくれた校長先生には感謝しています。
 こんな話を聞いたのは、「食わず嫌い」という言葉思い出したからです。何でも「めんどうくせー。意味わかんねー。いらねー」と片付けて手を抜く者が増えるのも中学二年生の特徴。ぱれないように上手に誤魔化した者がエライと思われ、そのツケが回つてきて後悔しても、授業で新しい事を習つた時、初めは誰でも難しいものです。「いらねー」で片付けられたら楽でしょう。でも一度じっくり考えたり練習することで理解できる事が多いのもまた事実です。保健や家庭科は入試科目にないからと軽く見られる人もいます。けれど、社会科や理科の集大成のような面もあり、奥が深いのです。難しい事のおもしろさは勉強もスポーツも同じ、やっただけで味わえる醍醐味を多くの人に体験して欲しいのです。
 いつやるか？
 (大塚稔夫)

中学三年便り

家族との絆

先月、友人夫婦に三人目の男の子が誕生し、近所の病院まで出産見舞いに行つてきた。これまで生後数か月の子を見ることがあつても、生まれてから数日の乳呑み児を病室で間近に見るのは私にとって生まれて初めての体験。わずかに三〇〇グラムの子が赤ん坊が白い肌を身まといつて可愛いの一言に尽きる。その友人からは出産時のエピソードを聞くことができた。帝王切開(腹部を切り開いて胎児をとります手術)での出産後、はじめのうちは麻酔のおかげで痛みはなかったが、麻酔が切れた後に酷い痛みを襲われたこと。また、同じ病室の向かいのベッドにいる女性も自然分娩を強く望んでいたが、胎児の頭が大きすぎたために、緊急で帝王切開に切り替えて、その結果出産が一日半に及んだこと等、非常に生々しい話ばかりであった。無事男の子を出産した友人の表情と、あくびを繰り返す赤ちゃんの表情が、いずれも安堵感に満ち溢れていたのが印象的だった。
 家族の在り方はそれぞれだが、私たちは皆、母親から様々な痛みを伴って産まれてきたという事実を改めて考えさせられた三十分間の見舞いだつた。中期の英語で、中三の生徒全員にAn Important Person in My Lifeというお題で数分間の英語のスピーチをしてもらったが、その中で「家族」をテーマに話した生徒がいた。家族との絆を感じられ、微笑ましくなったのを思い出した。家族が集まる年末年始。家族と過ごす時間を、感謝の気持ちをもって大切に過ごして欲しいと願う。
 (白石大知)

高校一年便り

深い学びを

高校生になって初めての年も、残り後わずかとなくなりました。これまでに振り返つてみて、皆さんの高校生活はどうでしたか。中期は行事が多いこともあり、体育祭や文化祭など人によって様々な思い出があると思いますが、皆さんが共通して感じているのは「変化の年」ということであつたと思ひます。新校舎の完成に伴い新しい教室ができました。また、グラウンドや体育館など皆さんの学校生活において少なくない変化がもたらされたことだと思ひます。そんな中で、一番大きく変化したことは、君たちがもう中学生でなく、高校生になつたということでしょう。君たちはもう、義務教育としてではなく、義務教育が自分たちのために勉強をする道を選び、今に至つているということなのです。
 テストに近づくにつれ良えれば良い」という言葉。本当にそれでいいですか。もちろん、不合格を取らないために苦学な科目については丸暗記をすることがあるかもしれませんが、しかし、全ての物事に対して「何故」を考へることを止めて、新しいものをただ覚えるという作業の繰り返しになつてしまつていませんか。
 せっかく高校生になつたのだから、一歩先へ進んでみましょう。自分が直面している物事について深く考え、それについて深く知つてみましょう。そうすることで、自分の周りだけでなく、自分自身も変わつてくることがあります。明るく、鋭い感性を持つて君たちです。より深みのある人間になれるよう、この高校時代を「考へる時間」にしてみてもらいたいと思ひます。
 (新島 亮)

高校二年便り

「高二中期」という時期

気がつけば、高校二年の半分以上が終わり、三年間の高校生活も振り返り地点を過ぎています。
 私は、それぞれの学年や学期に固有の良さや楽しみを見出していますが、その中でも、高二中期を越えた頃、つまり、これからが最も面白いと感じる時期です。
 それはきっと高二の生徒たちが、様々な学校行事や活動の中で中心的な役割を担い、予め決められた指示や教えを受動的に消化することだけではなくて、自ら主体的に環境に働きかけ、他者との関わり方を深く学ぶからでしょう。実際に、そのような実践の光景を多く目にしました。
 学校生活を含む社会生活全般において、人間は、社会文化環境に収束的に適応するだけではなくて、相互に複雑な影響を与え合い、それによって、環境を新たに作り変えることができる存在でもあります。
 環境を変えようという不規則で多用な変数を含む社会的現実と直面すること、環境に順応すること以上に難しく、常に苦学や葛藤を伴う過程です。けれども、高次な思考はその難しさから生じ、その外面的な表現/媒介の手段である言語や行為も徐々に洗練されたものへと変異します。
 中期までに経験した出来事によって、「私」という主体が少し変容したと感ずる生徒が多いのではないのでしょうか。残りの高校生活でも、君たちが、どのようなダイナミズムを生み出してゆくのか、そしてどのようになつてゆくのか、楽しみにしています。
 (綾部保志)

高校三年便り

Do YOUR Best!

高校の第三学年も、もう締めくくりに時を迎えようとしています。君たちの学校生活はどんなものだったでしょうか。
 立教池袋という学校では、自分を取り組みたいと思つたら、本当に数多くのチャンスがそこに待っています。その中から、大切なものをさがし、見つけ、伸ばしていく、それができる学校です。君たちにはどんなことが思い当たりますか。
 例えば校外学習。自ら企画し、学年の賛同を得て、実際に現地へ足を運ぶ。ボランティア活動。どうしても何かをしたいという強い思いを現実にする。海外プログラム。未知の世界で、新しいコミュニケーションを育んでいく。
 そして生徒会活動や部活動。身近な中に価値を見いだすこともあるでしょう。自分が育んできたものを今一度ふりかえれば、きつと大きな得たものに気づくはず。君たちは、ひとりひとり

が、それぞれの賜物を持っていて、それぞれが君たちの未来は、ずっとつながっています。これからは変わらなく、「常に自分の最善を尽くし、人にはやさしくあれ！」と願っています。
 (初瀬川正志)

今日の聖句

「狼は小羊と共に宿り、豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち、小さい子供がそれらを導く。牛も熊も共に草をはみ、その子らは共に伏し、獅子も牛もひとしく干し草を食らう。乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ、幼子は蝮の巣に手を入れる。」
 (イザヤ書11:6-8)

救い主がお生まれになったのは、地上にこのような平和の景色をもたらすため。そのことをこの季節、改めて思い起こしたい。

